《論　文》

スポーツにおける“不快な指導”の実態について

―スポーツ健康科学科４年生を対象として―

宗宮　悠子，膳法　亜沙子

About the actual situation of “uncomfortable guidance” in sports

—Targeted 4th grade students of Sports and Health Sciences Department—

Yuko SOMIYA, Asako ZEMPO-MIYAKI

キーワード：指導者，体罰，スポーツコーチング

Key Word：Teacher, Corporal Punishment, Sports Coaching

要旨

平成24年12月に起きた生徒の体罰問題を受けて文部科学省は，運動部活動における体罰防止対策として平成25年５月に「運動部活動での指導のガイドライン」をとりまとめた。しかし，昨今でも体罰問題のニュースは後を絶たない。本学のスポーツ健康科学部では，スポーツ指導者を多く輩出しているものの，実際に体罰経験者の実態について調査報告がなくその実態は不明である。そこで，体罰経験についての実態を把握し，体罰の根絶を目指して『良きスポーツ指導者』の教育をするための教材資料としてガイドラインが策定される平成25年度時点で中高生時代を過ごした現在の本学大学４年生126名において不快な指導あるいは暴力的な経験に関する実態についてアンケート調査を実施した。その結果，本学大学４年生の体罰経験比率について全国平均を上回ることが明らかとなった。また，自由回答において単に暴力的な指導を受けた経験のみならず，不快な指導経験を有する学生の意見には，不快に感じた要因として指導者が生徒個々人の気持ちに寄り添わず，コミュニケーション不足を挙げるものが多かった。一方で，やる気になる指導者の特徴として褒める，理由付けをしたアドバイスの提供などの意見が挙げられた。体罰経験者は将来的に体罰を容認する傾向が認められていることからも本調査結果を体罰根絶のためのスポーツ指導者教育をするための一資料としたい。

1．緒言

平成24年12月に大阪市立桜宮高校でバスケットボール部に所属する生徒の体罰によって自らの命を絶つというスポーツ指導の現場において起きてはならない事案が生じた。これを受けて文部科学省は，運動部活動における体罰防止対策として平成25年５月27日に「運動部活動での指導のガイドライン」（以下，ガイドラインとする）を含めた調査研究報告書をとりまとめた。全国大学体育連合が報告した運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告書においてスポーツ指導において体罰を経験した大学生の半数が体罰を容認するとの回答をしている。このことから，将来的にスポーツ指導に携わる者に体罰経験者が含まれることにより，体罰を根絶することができない問題が生じる。長谷川（2016）は，体罰を肯定する文化が定着し，スポーツ活動を通じて自己形成されたと考える者ほど体罰を肯定する意識が強く，その者が指導者になることで再び体罰が繰り返される可能性があることが確認されたことを報告している。

流通経済大学スポーツ健康科学部では，中学高等学校の保健体育科教育教員やスポーツ指導者を多く輩出しているものの，実際に体罰経験者の実態について調査報告がなくその実態は不明である。そこで，体罰経験についての実態を把握し，体罰の根絶を目指して『良きスポーツ指導者』の教育をするための教材資料として本学大学生において不快な指導あるいは暴力的な経験に関する実態についてアンケート調査を実施するものとした。

2．方法

2019年度現在，スポーツ健康科学部に所属する学生144名に自由記述回答のアンケートを実施した。その中から４年生の回答のみ抜粋し有効回答である126名の結果をまとめた。

なお，アンケートの内容は，以下の通りである。

・今までに不快に感じた指導をされたことがあるか？　はい　いいえ
・暴力的な指導をされたことがあるか？
はい　　いいえ
・実際に不快に感じた or やる気が出た指導のどちらかひとつの具体例を書いてください。

3．結果

今までに不快に感じた指導をされたことがあるか？について，はいと回答した者は，91名（72％）であった。暴力的な指導をされたことがあるか？について，はいと回答した者は，43名（34％）であった。

実際に不快に感じた具体例を書いてください，の自由回答については以下の通りである。

・小学生の頃にメガホンで殴られてやる気を失った
・体罰
・顔面にボールをぶつけられる
・物を投げたりするような指導があった
・別のコーチがふざけた練習をしているのを何で言わないんだ，と頭を叩かれたこと
・高校時代殴られたことがある
・殴られる
・ホウキで叩かれた

・口だけで対した指導をしない
・自分の意見（生徒）を聞かない
・話を聞かずに文句だけ言う
・自分主体に考えを押し付けてくる指導
・自分の判断に対する文句
・理不尽な言い方，100%無理な指導
・理不尽に怒られる
・自分の意見を曲げずに間違った指導を続ける人
・その時の状況，シチュエーションを理解しようともせずにミスした部分だけを切り取って
・一方的に怒られた
・暴言
・アドバイスではなくて文句を言う
・自分の忙しさで機嫌が悪くなる
・何でもかんでも怒鳴る
・自分の意見を聞いてくれなかった
・人の事が全く考えられてない，発言の仕方が偉そう
・見下し
・人によって怒ったり，怒らなかったりする事は不快だった
・高校の時，自分だけ注意されることが多かった
・結果は自分の方が良かったのに先生のお気に入りというだけで他の人が選ばれたこと
・一定のメンバーにばかり集中的に指導し，別メニューをする
・お気に入りのメンバーとそれ以外で少し態度が違うとき不快に感じた
・以前の状態よりもいい結果が出た時でもまだまだ足りないと言われた
・良いプレーを言わずにミスしたプレーばかりを言ってくる
・どんなに頑張っても見てくれなくベンチに入ることができない
・普段の練習を見ないで大会や試合の時のポジションを決める
・いいからやれと言われた。
・全員のことを見ていない，部活に来ないのに文句だけ言う
・１回のミスで交代
・本気でやっていたのに，帰れと言われた
・チームメイトが激しい叱責を受けていた時不快に感じた
・説教された人が居て，その怒りを周りにも，流してきたこと
・生徒主体で考えさせてくれたが，ヒントも何も与えてくれなかった
・試合に負けたから走らされる罰は不快だった
・何も指導されない
・今日のメニューらこれで終わりだと思った時にもう１つメニューを追加されるとやる気がなくなる
・シュートして外した時の監督の表情
・後輩の失態，部則違反に対し，キャプテンであった自分が悪いとひどく叱責された

次に，実際にやる気が出た指導の具体例を書いてください，の自由回答については以下の通りである。
・自分のことのように喜ぶ
・褒めて伸ばす指導
・一緒に戦ってくれる，意見を聞いてくれる
・実際にやって見せてくれる指導
・率直に褒めてくれる
・自分の行動（チームの為に動いたこと）を労ってくれた
・プレーについてほめてくれる
・ミスに対して，根本的な理由から説明してい

る
・褒められた時
・わからないことを監督に聞いたら，実際に動いて見せてくれた，意見を聞いてくれた
・部活動が終わった後はバスケを引きずらず話しかけてくれたことで次に切り替えることができた
・失敗しても褒めてくれる（プレーを分析をしてくれる）
・良いプレーをして，上手くいった時に褒められたら，また次の試合も頑張ろうと思う
・良いプレーをした時はナイスなど言ってくれる
・一回は見捨てるが，その後自分達の起こした行動を認め，次につなげてくれる
・褒めてくれる
・褒め伸ばし，目標を示してくれる，未来性
・自分の事を考えて，細かく体の動きを教えてくれた
・しっかりとプレーを見てくれて，細かいミスなどを見つけてくれる
・自分の良い点を評価してくれる
・任せたぞと言われた
・生徒達に課題が何かを考えさせてくれて，その課題をクリアする為にメニューを否定せずに指導してくれてやる気が出た
・走り方のアドバイスを聞きに行くと，その直前に走ったフォームを見ていてくれて，褒めてくれた後に改善点を教えてくれた時
・自分だけ別メニューで１つの技を極めさせてくれた時
・先生が率先して練習に参加してくれた
・滅多に褒めない人が褒めてくれる時は嬉しい
・お前はチームの心臓だと言われてやる気が出た
・自分達の気持ちを理解しながら叱ってくれた
・失敗しても次はこうしよう！と前向きな声をかけてくれる
・プレーについて細かく言ってくれる，今後のことも考えて指導してくれる
・走力に応じて距離を少しずつ長くしてて走る練習はモチベーションが上がった
・練習中に褒められた時は，認めてもらえた気がして自信を持てた
・１〜10まで教えるのではなく，１考えて考えさせる指導，自分で考えて上達したのを気がついて褒めてくれるのがしっかり見てくれていると感じてやる気が出た
・チャレンジすることに対して，注意されたり怒られる機会がなく，常に向上心を持たせてくれた
・高校時代の顧問の先生が，大会当日に厳しくなく，優しく「大丈夫」と声をかけてくれて，肩の力が抜け良いパフォーマンスができた
・良いプレーを褒めてくれて試合で使ってくれた
・しっかりミスを指摘してもらい，そのためにメニューを考えてくれた
・選手を盛り上げる
・楽しく教えてくれる，プレーを丁寧に教えてくれる，成功した時は褒めてくれる
・上手くできた時，結果が出た時はとにかく褒める
・指導者が初めて教える競技で生徒と一緒になって練習をしてくれたこと，できない，やったことないことでもその競技について知ろうとしてくれたこと
・生徒主体の時コーチが一方的に言うより選手が自ら考えてやる方が良い，強くなる
・チームのに１つの目標をたたえ，ミーティン

グした時
- 失敗は素直に叱ってくれて，良いプレーは褒めてくれる
- 失敗した時にどうすれば良かったのかを明確に教えてくれた
- 普段あんまり褒めないコーチが，いいプレーをした時，拍手して褒めてくれた時
- 良いプレーをしたら褒めたり，試合で勝ったら一緒に喜んでくれた

5．まとめと考察

本調査では，2019年度現在において大学４年生のスポーツ健康科学部に所属する学生に対し，不快な指導あるいは暴力的な経験に関する実態についてアンケート調査を実施した。文部科学省をはじめとする社会全体が体罰根絶に向けた対応を急務の課題としている。ガイドラインでは学校の運動部活動において適切かつ効果的な指導の展開と各活動の充実を目指して指導において望まれる基本的な考え方，留意点を示している。このガイドラインが策定される平成25年度時点で中高生時代を過ごした現在の大学生に部活動における不快な指導あるいは暴力的な指導経験についてアンケート方式で回答を求めた。その結果，非常に多くの学生が不快な指導あるいは（かつ）暴力的な指導を経験したことがあると回答した。全国体育連合が示している運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告書では，体罰の経験者が20.5％であると報告している。それに比べて本調査における本学の大学４年生の体罰経験者は，30％を超えていた。先の報告書において体罰を受けた時期で最も多いのは，中学校時代（59.1％）であった。本調査における大学４年生は，桜ノ宮高校の事案が起きた平成24年度に中学生であったことから，ガイドライン策定前のこの時期に体罰や不快な指導を受けた可能性がある。

ガイドラインには，運動部活動での指導充実のために必要と考えられる７つの事項が挙げられている。中でも注目すべきは，第４項目として挙げている『適切な指導方法，コミュニケーションの充実等により，生徒の意欲や自主的，自発的な活動を促しましょう。』と第５項目として挙げている『肉体的，精神的な負荷や厳しい指導と体罰等の許されない指導とをしっかり区別しましょう』である。本調査の中で不快な指導あるいは暴力的な指導経験のある学生があげた自由回答の中には暴力を実際に受けた，生徒の意見を聞き入れず指導者の想いを一方的に押し付ける指導，生徒間で異なる対応をする指導，日常の部活動においてコミュニケーションが不足している，生徒主体と言いながら何もヒントやアドバイスをもらえない，などの声があがった。ガイドライン中には，運動部活動は生徒の自主的，自発的な参加によるものであることを踏まえて，生徒に対する説明及び生徒の理解により行われることが必要であることから，指導者は，活動の目標や方針，指導内容等について生徒が理解できるように適切に伝えることかこそ重要であるとしている。すなわち，本調査の回答にて生徒側が理解を示さないような言動を指導者がしていたとするのは，このガイドラインに反している経験であると言える。さらに，ガイドライン中に日常の指導において指導者と生徒の間のコミュニケーションの充実により，練習について誰が，何を，いつ，どこで，なせ（どのような目的で），どのように行えばよいのか等を理解させていくことが重要である，としている。本調査においても普段の練習にお

いて指導やコミュニケーションをとらず，試合のポジションを決める指導を不快に感じたと回答している。これは，生徒のことを理解しない指導であり，ガイドラインに反する経験であると考えられる。

一方で素直に生徒のプレーを褒めたり，よい結果を一緒に喜んだりした指導でやる気が出たと回答している点は興味深い。また，指導者の的確なアドバイス（理由をつけて失敗にアドバイスをくれる）によってやる気が出たとする回答もあった。ガイドライン中において生徒の状況の細かい把握，適切なフォローを加えた指導，指導者と生徒の信頼関係づくりをすることが大切であると述べられている。特に指導者は，普段から練習中に声を掛けて生徒の反応を見たり，疲労状況や精神状況を把握し，指導することが大切であると述べられている。では，よい運動部活動の指導者とはどのような特徴があるのか，について本調査の回答を踏まえて考えてみたい。矢澤（2019）が報告している先行研究によると『褒める』，『自信を持たせてくれる』，『勝てる』などの指導者の言葉によって生徒側がやる気を出すという結果を示している。特に，プレーで失敗しても怒らずに誉めたり，生徒の気持ちに寄り添うことでやる気を出すことを報告している。また，栗田ら（2018）は，自由記述アンケートによって大学３年生が考える理想的な指導者について，人格形成，スポーツの楽しさを重視する指導，雰囲気作りをしながら選手に考えさせ競技力を向上させる指導技術が重要との回答を報告している。本学の学生の回答においてやる気が出た指導の『褒める』という点は先行研究の結果と一致している。また，よい結果を一緒に喜んでくれるという回答については，雰囲気づくりをする指導者がよい指導者である栗田ら（2018）との回答と一致している。体罰経験のある学生は将来的に体罰を容認する傾向にある可能性が高いことから，今後は本報告をもとに体罰の根絶を目指した良きスポーツ指導者の教育をするための一資料としたい。

６．結論

本調査では，2019年度現在において大学４年生のスポーツ健康科学部に所属する学生に対し，不快な指導あるいは暴力的な経験に関する実態についてアンケート調査を実施した。本調査において本学の大学４年生の体罰経験者は，30％を超えていた。また，不快な指導経験を有する学生の意見には，不快に感じた要因として指導者が生徒個々人の気持ちに寄り添わず，コミュニケーション不足を挙げるものが多かった。一方で，やる気になる指導者の特徴として褒める，理由付けをしたアドバイスの提供などの意見が挙げられた。体罰経験者は将来的に体罰を容認する傾向が認められていることからも本調査結果を体罰根絶のためのスポーツ指導者教育をするための一資料としたい。

参考文献

ａ）運動部活動での指導ガイドライン（平成25年５月）．スポーツ庁政策課学校体育室
運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告書．全国大学体育連合．

ｂ）矢澤久史．指導者の教え方がスポーツ選手のやる気に及ぼす影響（2019）名古屋短期大学紀要，57：15-25.

ｃ）栗田昇平，矢野裕介，山本浩二ほか（2017）大学生の保持するスポーツ指導観の実績と変容可能性—福祉系大学体育系３年生を対象として—．神戸福祉大学紀要，18：11-18.

ｄ）長谷川誠（2016）学校部活動における「体罰」問題に関する研究：体罰を肯定する意識に着目して．神戸松蔭女子学院大学研究紀要５：21-34.